

# 第1回 ライトノベル作法研究所主催 大夏祭り大会 選評評価シート

作品名：「偽りの玲子」

テーマ：「ついこの間まで僕のことを名前すら憶えていなかったのに、今は僕の思い通りな美少女」

キャラクター

55

ストーリー

55

テーマ(設定)

60

文章力

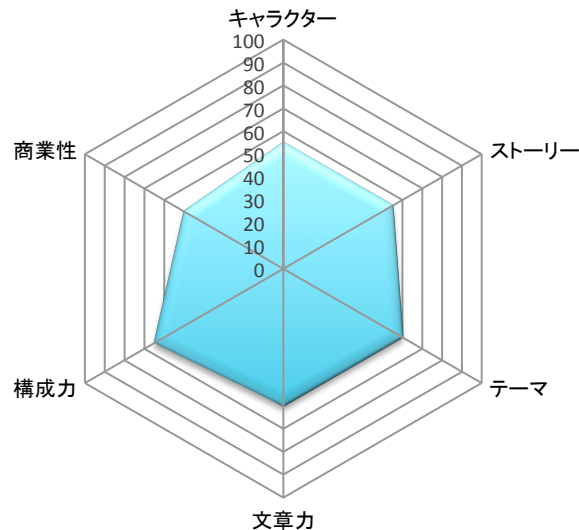
60

構成力

65

商業性

50



## ・見受けられる基礎的な問題点

- ・キャラクターに個性がない(もしくはその個性を生かしきれていない)
- ・キャラクターの設定にオリジナリティがなく、読んでいて新鮮さに欠ける
- ・キャラクターの行動に動機がなく、物語がご都合展開になってしまっている
- ・物語の方向性が定まっておらず、読む側にだるさを感じさせてしまっている
- ・物語に登場人物達にとっての障害が登場せず、盛り上がりに欠ける
- ・テーマ(世界観)が既存の作品の焼き回しで差別化されていない
- ・物語上必要のない設定を多く登場させ過ぎている
- ・意味の無い暗いテーマ(人の死、暴力等)が扱われており、後味が悪い
- ・プロットの練り方が甘い(基本的な起承転結が意識されていない)
- ・時系列の流れが不自然、もしくは視点移動が多過ぎて構成が理解しにくい
- ・物語の情景描写が足りず、読んでいて状況を想像できない
- ・文章が難解かもしくは文法的に問題があり、よく読まないと内容が理解できない
- ・伏線的な要素がなさすぎて驚きに欠ける
- ・笑いをとれる下ネタが少なく、読んでいて冷める下ネタが多い
- ・「この作品の最大の魅力はこれ!」というものがない

## ・総評 (もしくは、今後これをやったら更に面白い作品を書けるようになるかもという話)

・アンネの日記は確かにアンネ本人ではなくアンネの父親が依頼した作家(?)によって書かれたものであったはずなので、個人的な読み方として、「この本は彼女にしか書けなかった。他の誰にもね」という露伴君が少し面白おかしくした。演出かどうかは分からないが、作品全体に渡るキャラの通ぶっている感が良かった。  
 ・伏線の張り方が巧く、アンネの日記は隠れ家が見つかった唐突に終わるというくだりを、玲子が死んで物語が唐突に終わるといった対比の形で回収するのは非常に趣深くて良かった。ハーブティーの設定があとから重要なポイントを占めてくるのも面白い。  
 ・ライトノベルではないが、商業的には十二分に通ずる作品であるように感じた(乙一作品的な面白さを感じた)。ライトノベル感を期待して読んでいる読み手にすれば少し主人公設定がダーク過ぎるかもしれないが、読めた「力」、「花火大会なんてなかった」、「玲子は死んだ」、このような謎に次ぐ謎は読み手に対する牽引力として超効果的に働いているように見える。強いて問題をあげるとするならば、ほんの少しだけ読み手がくすりと笑うようなエンターテインメント性が欲しいということか。謎と驚きといった面での面白さは事足りているが、正直暗過ぎる印象は拭えないため、例えば玲子と仲良くなったところで読み手が純粋に笑えるような面白おかしいやり取りが一つ二つくらいあるとまた一段と作品の魅力が増すのではないだろうか。

合計加点ポイント 0

総得点: 345 / 600

B方式総合得点: 19838 点